

## 特 集

## 牛乳と草のつながり

三友 盛行

中標津町・酪農家

皆さん、こんにちは。ただ今紹介をいただきました三友です。中標津で酪農をしています。昭和43年に現地へ開拓入植に入りました。その前に根釧パイロットファームで2年ほど実習をしています。以来、45年ほど酪農に携わっています。

今日、ここでは、三つの学会が一つになったという、時代の流れかと思えます。同時に、実際の酪農家を学会に呼んで話をさせようという、これもまた時代だと思えます。時代というのは結構動くのです。僕はここに立つような人間ではなくて、酪農界のトップランナーはたくさんいると思いますが、周回遅れのトップランナーです。それも3周目です。今から20年ぐらい前に、時代が僕を通り越していった時、瞬間的にトップランナーとしてテレビに映るといふ、そういう状況です。その時は、酪農家が、これから発展していく中でどういう道を選択しようか、さらなる規模拡大をするのか、従来どおりするのか、あるいはバルクが入った時のように離農をするのかという、酪農家が自分の進路を選択する、そのことができる時代だったと思えます。選択してたんたとやっている僕に時代が瞬間的に光を当てました。

10年前にはバブルが崩壊して、さらに、これから酪農家がどういう道を選んでいくかということがあって、かなりの酪農家がさらなる規模拡大をしてきました。マイペース型というような放牧酪農家も少し残っています。3周目が今です。1周目と2周目の最大の違いは、それぞれ選択ができた時代でした。今は地震もあったし、それから、原発がああいう形になって、経済が、地球は一つだ、TPPも始まってきた。そういうことになってくると、きっと選択ができない時代にきたのだらうと思うのです。細かい選択はできるけれども、大きい選択はできない。それは、地球そのものには限界がある、限界があるということを知りながらやってきて、だけれども、限界が身近になってきた。だとしたら、われわれの暮らしも見直そうという時代にきたという選択がないということです。細かい部分では皆さんも選択するのだらうと思います。そんなことを背景にしてお話ししたいと思います。

今日の発言要旨がノートになっています。随分立派になっていて、これを読んでもらうといいわけです。少しおさらいをします。僕は根釧パイロットで実習をしまして、根釧の話からしたいと思います。草地型酪農です。根釧には昭和6年と7年に大冷害があって、もうにっちもさっちもいかない。むしろ旗を立てて、道庁にまで農民の代表が来ました。その中で唯一、穀物はできないけれども、草ならできるということが、経験的に、体験的にあって、そこで初めて乳牛を導入しようということになりました。ですから、草だけはある。草があるから、乳牛をとおして牛乳生産をして、酪農で生きていこうということです。これが、欧米も含めて、米は言わないほうがいいですね。欧のほうを含めていけば、草があって、もっと言えば、穀物ができなくて、草しかない。そこに家畜が導入されて、人が暮らしてきた。ある意味では、自然派生的な部分もあって、ヨーロッパ等々の酪農というのが、畜産も含めて発展してきた。日本も草しかないという中で乳牛を入れてきました。ところが、草しかない酪農にウシを入れてきた時に付いてきたものが一つあります。この付いてきたものの一つが今日の酪農を宿命づけたのです。非常に不幸な生い立ちが一つあったと思えます。

それは借金という形で酪農を導入したことです。ヨーロッパは有史以来、草のあるところにいろいろな形で家畜を入れて、いわゆる自然派生的というか、暮らしの中で少しずつ、時間という歩調の中でやってこられたのに、北海道の酪農は借金という形でウシを入れてきたのです。ですから、借金は返さなくてはいけません。最初は、道の貸与牛ですから、雌が生まれたら返さないといけない。当然、そういうことになる。この借金を返していかなければいけないという宿命的な誕生についてはしっかり受け止めたほうがいいと思えます。ですから、借金を返すためには生産を上げなければいけない。

もうひとつは、自然派生的な酪農でないですから、牛乳は換金作物です。換金作物、そして、借金、生産を上げて借金を返す。さらに生産を上げるためにまた借金をして。それが昭和年代ずっと続いてきました。同時に、国も生産性を上げることによって農家経済を安定させたい。それは当然です。そのために研究機関

に対して、やはり増収、多収、効率というものを求めてきた。戦後、高度成長の中で、日本全体も経済が大事。経済というのは、当然、コスト、効率を求める。われわれもいつの日か、自由化が来るのだからといって補助金をもらって効率にまい進をしてきた。農家も研究も、それから、国もみんな効率を求めてきた。それは経済効率です。経済効率という、今思えば不幸な生き立ちを持っているのです。それは、戦後、日本の経済効率主義という経済の中で、ものは増えたけれども、なんか貧しいのではないかという、そんな部分の国民性も含めて、戦後生まれでずっと頑張ってきた僕の世代とすれば残念だな。だけれども、その残念な部分を、これからは是正できるのかなという部分では明るく思っています。

今の経済主義でいくと、草は土から離れています。ウシも土から離れて、草から離れて。一番は、経営者が酪農という形を使っていますけれども、まったく農業から、農から離れてきました。国は農民から経営者になれと言ってきました。農民でなく、経営者になれと、戦後、ずっと農政は言い続けてきました。経営者であれば、当然、経済性を重視すると。そういう流れの中できました。ここに書いてあることはあとで読んでいただきたいと思うので、時間がそれほどないのでお話しします。

三友牧場のこの50年近いことをお話しすると、農家と研究者の距離を短くしたい。もっと言えば、接点をより多くしたいという思いがあります。そういうことからいけば、農家は実践者であり、経営者であり、いろいろな部分の要素を持って、いわゆる皆さんが研究している一つ一つを全部一身に引き受けながら、自分の中でまとめながらやっていますから、そういう部分では、皆さんが実践者をのぞき見るというのは非常に有効だと思うのでお話しします。

三友牧場が今日、続いてきた幾つかの具体的な話をして、皆さんを現場に誘いたいと思います。入植はパイロット方式で草地造成をブルでしました。根っこ拾い、種まきから何から全部手でやりました。入植以来、草地更新はしたことがありません。それから、化成肥料は、入植した時には普及所の先生がびっちり付いてくれて、標準量をまきました。標準量をまいているのですけれども、草を見ていると、決して標準量を求めているのではないかということが少しずつ体験的にわかってきて、標準量、当時は一番草に化成肥料2対、40キロで、2番草には1袋10、20キロ入れろというのが標準量でしたけれども、それを少しずつ減らしてきて、今では、放牧地はゼロです。十数年来ゼロで、採草地もほとんどゼロで、今、単に10キロぐらいの肥料を入れているのが5～6町ある程度で、来年からはそれもゼロにしたいと思います。追肥は、根釧は連休明けにいち早くやろうというのが標準ですけれども、僕

は5月20日ごろにやります。なぜかということ、単なる怠慢ということですか。5月だと、ブロードキャスターの足跡がわかりませんけれども、5月20日ごろになると、トラクターの走った跡がわかりますから、よくまけるということです。ただ、5月の初めに本来はもっとやらなければいけない仕事があるのです。そのもっとやらなければいけない仕事を農家の人はなげておいて、作業の都合で化成肥料をまくのです。5月のゴールデンウィークにまいた化成肥料はほとんど吸収されていないと思っています。土地が乾いたら、2年なり、3年切り返した堆肥(たいひ)をまずまきます。それをまいて、尿をまいて、ばら線を整備してということをする、結果的に化成肥料は20日ごろになる。それは非常に合理的だと思っています。そんなことでやっています。

それから、草は8月にしか刈りません。一番草。一番草を刈ったら、もう2番草は放牧します。僕が入植した時は早刈り運動というのがありました。もう6月に刈ろうと。今、早刈り運動とは言わず、適期刈り運動と言います。草をタンパクだけで見ていいのかという部分があります。よく見ると、草には草の事情があるのです。草も、自分が成長して、次の年に生活できるような段取りで成長していると思うのです。人間の都合で早く刈ってしまうと、草は少しダメージを受けます。8月に刈る。8月に刈ると、タンパクは下がっています。草は熟成しています。それを、どちらをとるかということはまた別ですけれども、とにかく8月まで草は刈っていません。

一方、乳牛については昼夜放牧です。5月の初めに昼夜放牧しますが、慣らし放牧は一切しません。ウシの都合で決めます。同時に、終牧、この終牧というのはすごく大事です。できるだけ長く終牧したいと思うのですけれども、終牧は雪が降るまで。できるだけ外に出します。秋になると、ウシはもう行きたがらないのですけれども、それはもうしっかり放牧地まで連れて行きます。それが農家の仕事かなと思っています。掃除刈りは一切しません。掃除刈りは草には随分ダメージを与えます。それと同時に、掃除刈りをしないというのは天然の貯蔵方法ですから、きつとうちのウシは、今でも根釧の僕の放牧地で掃除刈りをしない草を食べていると思います。

それから、放牧中に穀物は一切やりません。ゼロです。パルプを若干やります。それはどういう理由かということ、チーズを作っていると、穀物は良くないです。乳酸菌にきいてみたのですけれども、乳酸菌は、古来、ずっと存在しているのです。でも、乳酸菌は穀物を食べた牛乳に出会ったことがないです。ここ10年か20年ぐらいです。乳酸菌というのはきつと地球の誕生と共に、生物も含めて、何億年と人を支えてきたのだらうと思います。乳酸菌は穀物をやった牛乳に出会ったこ

とがないのです。サイレージをやった牛乳にも出会ったことがないのです。チーズというのは、酪農というのは、貧しくはないけれども、乏しい地域の農業ですから、人が食べられるものはウシにやったことがない。サイレージというのはすごくぜいたくな作業ですから、当然、干し草しかない。干し草と放牧と、それは乳酸菌に非常になじみのいい世界なのです。そんなことも含めて、穀物はやらないようにしています。

搾乳は、ディッピングはしません。ディッピングをすると、乳房炎になる確率が高いです。ディッピングをしなくても乳房炎にならない飼い方が大事なので、乳房炎にならないようにディッピングするという飼い方は逆です。そんなことも含めてディッピングはしません。

疾病ですけれども、疾病は人工授精師が来ると、繁殖障害の話で、黄体があるとか、委縮しているとか、いろいろありますけれども、治療したことはありません。治療しないウシはどうかというと、秋になれば発情が来て大体止まります。秋になって止まらないウシというのは非常に有効なウシでして、僕は経営者としては決して立派ではなくて、選択の能力はありませんから、止まらないウシがいたら、ちょっと安心します。これは淘汰（とうた）の対象になる。みんな止まってしまうと、ウシが増えてしまう。ウシが増えたら大変なことになるのでやらない。ちなみに共済には加入していません。

僕は農機具を全部2ライン持っています。トラクターが7台ぐらいあるのかな。モアは3台、ローラーは3台、全部2ライン以上あります。常時スタンバイできます。大金持ちかというところと違うのです。平均30~40年同じ機械を使っています。機械は壊れないのです。僕はみんな中古の機械ですけども、機械は飽きられるだけです。飽きた人はみんな出すでしょう。壊れていないのだから、壊れていない機械を安く買って、2ラインしているということです。

僕がなぜこれと言ったかということ、僕は何もしていないということを言いたかったのです。うちに研修だとか、見学だとか、ここにも来ている人はたくさんいます。若い人にも、農家にも、いや、実は僕は何もしていないという話をするのです。何もしていないわけがないと言われてしまって、そうかなとそこで僕も立ち止まって話をちょっと止めます。僕も考えているのです。僕自身は何もしていない。でも、何もしていないのではなくて、今日、ここへ出るときにちょっと考えたのですが、学会の人が言っていることについては何もしていないのかなと思うのです。いわゆる指導機関がよしとすることについて僕は何もしていないと思っています。だけれども、ウシや草や土が快適に過ごせる環境については、僕は随分精いっぱいやっているのかなと思うのです。このバックボーンは、先ほど、

経営規模の話が出ましたけれども、基本的に1ヘクタールで1頭ということです。1ヘクタールで1頭というのは、僕の実習中の先人の人の言うことで、幸い、僕はいろいろな機会があって、世界中を回らせてもらっていますけれども、どこへ行っても、基本的に1ヘクタール1頭です。それで、草だけで搾れる牛乳というのは3,000~4,000です。ということは、ウシというのは大体1ヘクタールで1頭。僕は入植する時に言われたのです。1ヘクタールで1頭だけは守れと。それは、根室に住むおきてとは言わなかったけれども、限界というか、節度だろうと思っています。

それで、1ヘクタール1頭で、では食べられるのかということ。食べられるか、食べられないかということ、これはまた経済の視点です。僕は、ウシだとか草だとかはかわいいなと思うのです。かわいいなと思うときに、彼らがのびのび、草がのびのびというのはわかりますか。草が伸びているからのびのびではないのです。草が笑ったり、ウシが笑うという感覚があるのです。それは、人が草地に立ったり、あるいは牛舎に行ったときに、人間が快い気持ちにさせてくれる環境というのがあると思うのです。ザワザワしていない。彼らが快い環境にいて、自分も快い気分が共有できることが大事なのです。そこで生産された量を僕はよしとしているのです。それを足りないと言うと、どこかにひずみが生まれるのです。そんなことを含めて、僕は40何年やっていて、農民として成長したかなと思うときがあるのです。自分が農民として成長したかなと思うのは、受け入れる量が増えたかなと思うのです。だから、ウシも、時として、病気になって、時として死ぬこともあります。それは致し方ないことだと思っています。だから、研究も致し方ないところを残しておかないと、研究がみんなつまらなくなってしまう。

それと、もうひとつ、研究の話に飛んでしまいますが、昨日、今日、僕は研究成果を聞いていましたけれども、しっかりと結論を出さない傾向にある。あんなにデータがたくさんあるのに、しっかりと結論を出さないのです。なぜかということ、データが十分でないから結論も十分でないという謙虚さもあるのでしょう。僕は農業をやる時に若い人に言っているのは、毎日、毎日、いろいろなことに対応しなければいけないから、結論は出しなさいと言います。牛舎に行くと、ウシの具合が悪い。ウシはどうして具合が悪いのかなと思う。いろいろな要素がある。いろいろなことを考えて、考えて結論を出さないのはまずい。若い人に、結論を出しなさい。その結論は合っているか、合っていないかは問わないと言っています。だけれども、結論を出さないと前に進めない。前に進んで、出した結論が間違っている、あるいはちょっと遠い、そういうことがわかることが大事だと。研究者は結論を

出さないです、あんなにデータがたくさんあって。だから、私はこういうふうに思いますと言ってしまえばいいのです。そうしたら、あとで違ったということがわかるのだから。どこが違ったか、これは大事なことです。僕は66になりますけれども、三友さんて大したものだと褒めてくれる人がたくさんいます。僕はちっとも大したものだと思っていない。自分の人生を顧みると、失敗の連続だもの。失敗の連続だから、今日ここにきているの。今までの人生の失敗を皆さんにお話しできたらいいなと思っています。これが終わったら、今日の話は失敗だと思うのです。夜、頭がさえて寝られない時があります。そういうものです。だから、失敗の積み重ねが人生なのだろうと思います。研究もそう。良い研究成果なんて、それはちょっと視点が違うのかなと、そんなふうに思うのです。

それで、僕は牛乳と草のかかわりの題をもらっていますけれども、土とか草とかウシというのは、人間がいてもいなくても成長する、子孫を残す力は当然持っています。土と草と、象徴的に言えば、ウシの力をどう発揮させるかということが大事だと思います。何を求めるかという量で求めたら、彼らは立つ瀬がないと思うのです。彼らは、人がいてもいなくても、自分たちで生きていく力、環境に対応した能力をみんな持っているのです。その持っている部分を人がちょっと手を助けて、人が食べられる分をもらうという形です。そういうことからいけば、土と草とウシが主人公、農家はその支え手だろうと思います。その農家が支える部分を研究者の人がまた支えるということで、われわれは決して主人公でもないし、土、草、ウシに命令できるものでもない。僕は彼らの邪魔をしないというふうに考えています。彼らはちゃんと生きる力があるのですから。ただ、その生きる力をよしと受け止めるかどうかということが大事。われわれは、これから時代は選択できないという話をしました。選択できないということは、それぞれの有限な地球の中でどれを受け止めるか、量も含めて。何を受け止めるかということをしつかり選んでいかなければいけない時代だということです。今までどおりにはいかないと思います。

この間、家内が料理に使うと言ってはちみつを買ってきました。はちみつは天然はちみつと書いてありました。では天然はちみつが書いてあるというのは、天然でないはちみつがあるということです。ちょうどこれは原稿を考えていた時です。そうかといって、では天然の牛乳ってあるのかと思いました。天然の牛乳とは言わないものね。強いて言えば、草の牛乳と言う人もいます。それで、穀物を50%食べさせた牛乳は牛乳なのかとちょっと考えてみました。穀物をたくさんやった肉牛は天然の肉なのかと。違うね。畑に肥料をたくさんやった草は草なのかと。草地更新した土地は土地なのかと。地球が誕生して40億年、誰も自然は草

地更新しないものね。われわれは全部当たり前。資材を入れて、入れた資材以上のものをとるのは当たり前だと思っているけれども、実はまったく当たり前ではないです。だって、天然のはちみつと人工のはちみつがあったら、普通、天然のはちみつを買います。経済の問題は別として。欲しいと思う。配合を50%食べた牛乳を欲しいと思いますか。思わないでしょう。思わないけれども、仕方ないものね、商売だからということになっています。肥料をたくさんやった草をウシは欲しいと思いますか。思わない。僕はウシの嫌がることはしない。自分が嫌だと思うことはウシにはやらせない。だから、研究者も、草が嫌だな、ウシが嫌だなと思う研究はあまりしないほうがいいですね。

データの話。三友さん、ウシと話ができますかと。できない。できないけれども、ウシが何を表現しているかということについては知ろうとしている。どんなに忙しくても、ウシがいつもと違うことをすれば、僕はそこで立ち止まります。合っているかは別として、結論を出して対応する。あとで間違っていることがあれば改める。それをウシと対話をしているという見方ができるとすれば、皆さんはあれだけデータを持っているのですから、データは研究対象物との会話です。その会話が成立していないのです。データは示すだけ。データは会話。向こうから問いかけてきているのだから。皆さんはその問いかけにどれほど応えていますかと僕は聞きたいのです。みんなデータを発表しているでしょう。パソコンというのは良くないですね、データが出ているのだから。でも、このデータから、何を反応しているのかということが大事です。語っている人が言っていないのだもの。例えばウシのデータはこうですと。ではウシはどういうふうに考えているのですかと。誰も言っていない。

今日、いろいろな話を聞いていて、対象になった草だとか、ウシを見たいと思うのです。みんなのデータの集大成が草であり、土であり、ウシなのです。だから、同時に、ウシだとか、草の姿があれば、会話ができる。人間だって、健康診断へ行ったら、みんな病気になるでしょう。データだから。だけれども、みんな自分は健康だと思っているでしょう。2回目の健診へ行かないで死んだ人がたくさんいます。がんの可能性があると、行かないで随分死んだ友達がいます。データは無視しては駄目なの、正直だから。だから、データと会話ができたらいいなと思うのです。

先ほど、穀物の話が出ましたけれども、何を求めるかということこれから議論したほうがいいと思います。われわれは根室原野でいけば草しかない、草は1ヘクタールで1頭、そこで4,000キロぐらい、ちょっと足して5,000キロぐらい。そこで暮らしていくしかないのです。それが北海道の実力だと思います。ただ、4,000キロを出す、あるいは草の仕組みを、人間が少し

手を加えて、効率を良くするということは大事なかなと思います。それで、今、議論されているのは、例えば農業の話からすれば、自然農という立場をとろうという人が少しずつ増えています。もうひとつは慣行農法で従来通りやっていこうということがあります。有機農法。有機農法というのは、基本的に慣行農法の部類に入ります。われわれはマイペース酪農と言われてはいますが、マイペース酪農も慣行農業です。その慣行農業の概念を変えていく必要があると思います。それは、僕はここへ来るのに飛行機に乗ってきました。いわゆる化石エネルギーを燃やしてここに来た。電気もそうです。われわれは地球の資源と密接に暮らし、産業もあるわけですから、そこから手を切れない。ただ、その使い方をどういうふうに変えていこうかということは大抵だと思います。僕は、化石エネルギー、地球資源というのは初動エネルギーにしっかりと使っていったほうがいいと思います。農業で言えば、今のように多投入ではなくて、僕もトラクターを持っているし、電気も使っていますから、初動エネルギーを入れる。その初動エネルギーを入れたら、今度は物体、農業、あるいは牧場そのものが循環できるようなシステムを作っていけばいいと思います。ですから、自然農がいいとか、有機がいいとかということではなく、相対から見れば、低投入、そして持続する、いわゆる低投入持続型の農業というものがいいのかなと思いま

す。そして、その低投入持続型の酪農、畜産を展開するためにどういう視点で研究をするかということが大事なかなと思うのです。

皆さんの研究を聞いていて、納得することがたくさんあります。僕が現場でわからないことをこういうふうに言ってくれるとわかるなということが、昨日と今日、たくさんありました。だけれども、僕が納得していることがわからない。それは現場に行かないから。現場と皆さんの研究と一致する時代、低投入で持続、あるいは環境によしとするような、そういうことが実現できれば、消費者に安心と安全という信頼を得て、結果として、消費者もよし、作る人もいいし、売る人もいいという形になると思います。

うちはチーズを作っています。チーズはどんなに宣伝しても駄目です。チーズ自身が宣伝をします。コマーシャルする。いいものを作る。いいものというのはいろいろな要素がある。おいしいとか、安いとか、高いとかを含めてしっかりしたものを作り出す。しっかりしたものを作れば、それはどんなコマーシャルよりも有効です。作った作品そのものが人を呼んでくれます。作って売れないのはどこかに問題がある。そんなことで農業っていいなと思います。無理をすることはいいです。あるがままにいけば、そこに安心と安全と持続性があるということをお話して、終わらせてもらいます。ありがとうございました。

